

## 令和 3 年度 アレルギー疾患地域基幹病院アンケート調査概要

調査目的：アレルギー疾患地域基幹病院における現在のアレルギー疾患医療の現状、課題を把握し今後の課題を見出すことを目的とした。

調査対象：千葉県アレルギー疾患地域基幹病院 20 施設

回答数：内科系 13 施設

小児科 11 施設

耳鼻科 4 施設

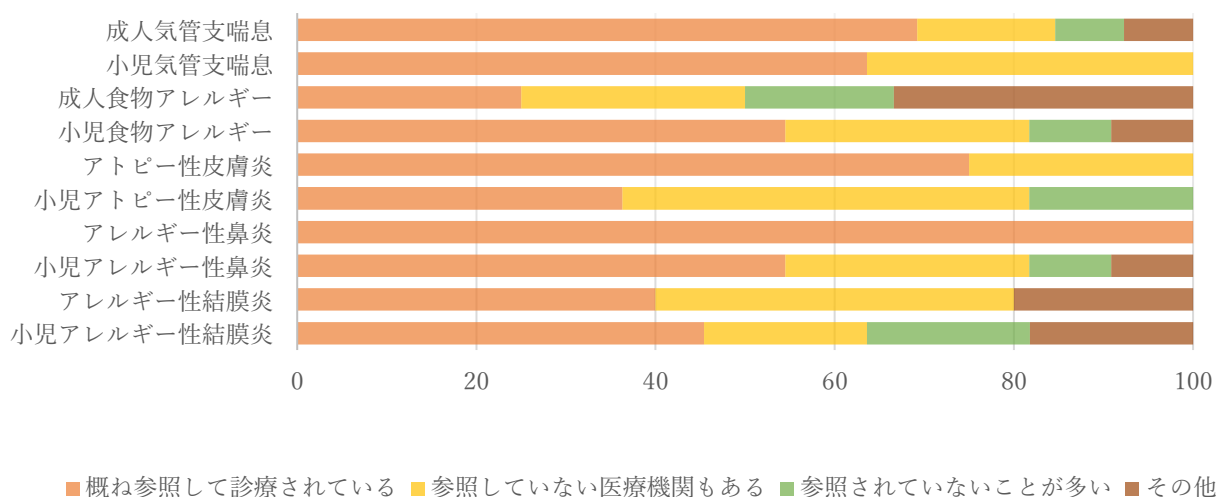
皮膚科 5 施設

眼科 4 施設

## 1. 各種ガイドライン使用状況

各種ガイドラインの使用状況では、アレルギー性鼻炎（耳鼻科）では 10 割、気管支喘息、アトピー性皮膚炎では 7 割が概ね参照して診療されていた。小児科においては、診療の性質上気管支喘息や食物アレルギー以外のアレルギー疾患を診療していることがあるが、アレルギー性鼻炎やアトピー性皮膚炎、アレルギー性結膜炎ではガイドラインが参照されていないことが多いとの回答もあった。食物アレルギーに関してはガイドラインに沿った治療というのが分かりにくいとの回答もあり割れた。

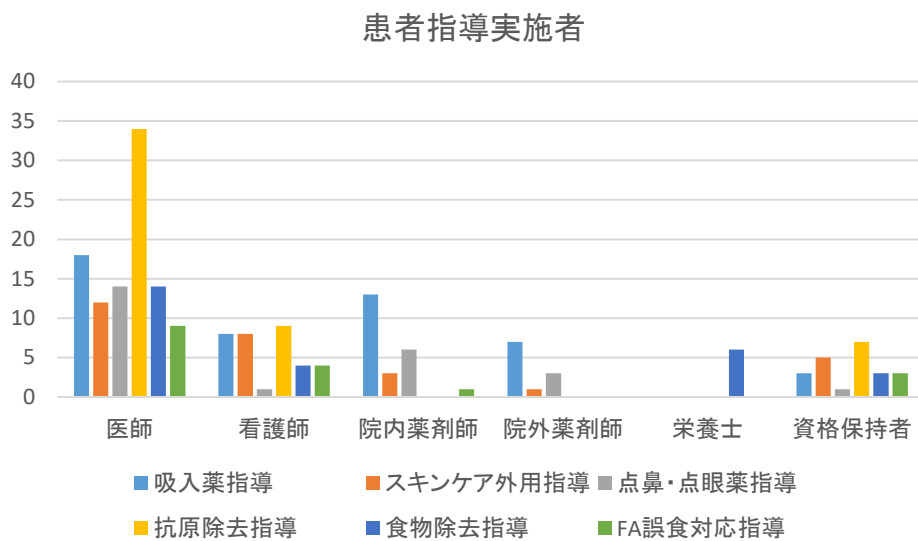
各種ガイドライン使用状況（％）



## 2. 患者指導実施状況・指導実施者

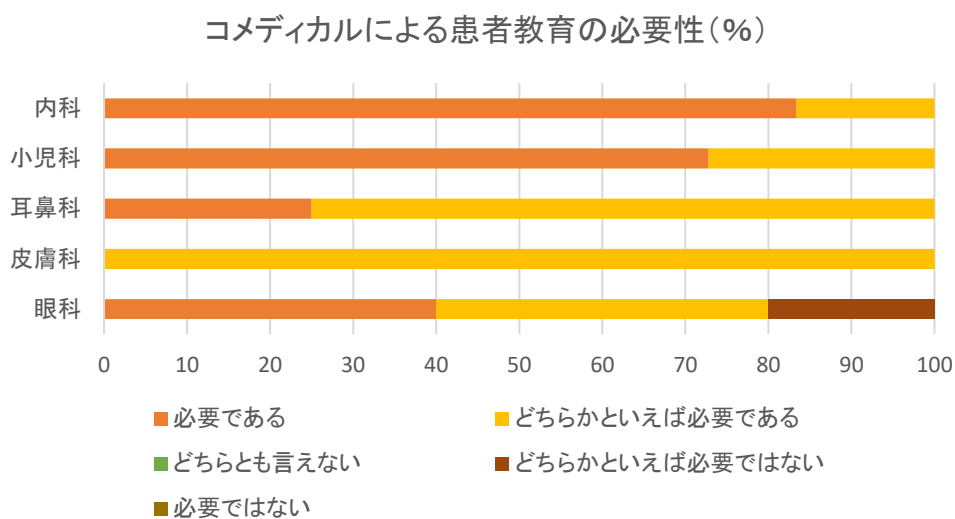
アレルギー疾患に関する病態、吸入薬指導、スキンケアと外用薬指導、点眼薬点鼻薬指導、抗原除去に関する指導、食物除去に関する指導、食物アレルギーの誤食時対応指導（エピペンを含む）の指導状況については、おおむねどの医療機関でも行われていた。

指導の実施者については、医師以外に吸入薬指導では薬剤師が多く、看護師はどの指導項目も行っている医療機関があった。資格保持者が指導しているのは小児科で多く見られた。院外薬局での指導では、吸入薬と点鼻薬・点眼薬で数件挙げられたが、医療機関でも把握できていないと考えられた。



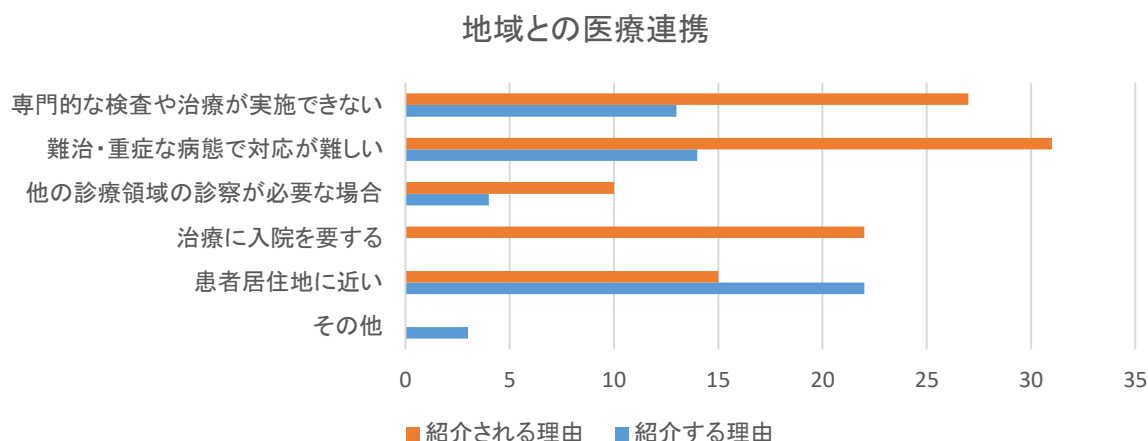
## 3. 医師以外の医療従事者の患者教育の必要性

内科、小児科、皮膚科において必要である、どちらかといえば必要との回答が多かった。

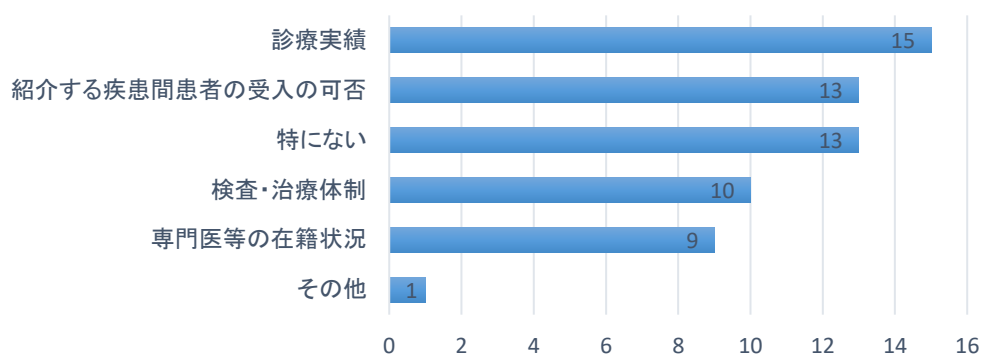


#### 4. 地域との医療連携と情報

地域との医療連携では、専門的な検査治療、難治な症例や入院加療が必要な場合の紹介を受けていた。一方で、地域基幹病院でも対応しきれない、他の診療領域の診察が必要な場合では紹介を行っていた。また、患者の通院の利便性から居住地に近い医療機関への紹介も挙げられた。紹介の上では、紹介先の診療実績や紹介先の医療機関が疾患に対応しているのかについての情報共有が必要と考えられた。



#### 紹介する上で必要な情報(複数回答)



#### 5. 地域と連携した取り組み

地域住民に向けた病院主催のアレルギー疾患関連の講演会の実施や地域の医療従事者向けの研修の実施（調剤薬局や地域診療所など）、地域の講習会等への開催協力などが行われていた。診療科単位での設問では、過去3年間地域との連携は行っていないとの回答もあったが、多くの地域基幹病院では5科のいずれかの診療科で取り組みが行われていた。

#### 6. 地域における各診療科におけるアレルギー診療についての問題

##### <内科>

アナフィラキシー例の増加や小児期発症のアレルギー疾患患者の内科への移行がスムーズに行われていないとの問題が挙げられた。また咳喘息に関して、安易な診断、過剰治療が目立つとの記載もあった。

##### <小児科>

地域における食物アレルギー診療のニーズに対応するために一般外来を活用や食物負荷試験を増やし

たりしているが、他の疾患の診療もあり対応しきれていない現状が挙げられた。

また、標準治療が確立かつ浸透している喘息に比べて、食物アレルギーは標準治療と呼べるものがないことによる問題を挙げられた。そのほかに薬の使用において保険診療より逸脱している処方についても問題となっていた。マンパワーについて、専門医が少ないことや患者指導のできるスタッフも少ないといった人材に関する問題も挙げられた。

アレルギー診療に関する施設間での情報共有が必ずしも十分でないことが今後の課題とされていた。

#### <耳鼻咽喉科>

委縮性鼻炎がやや多い印象であることや分子標的薬による治療には、開業の先生方はあまり積極的ではないように感じるとの問題が挙げられた。

#### <皮膚科>

重症のアトピー性皮膚炎患者に有効な治療が出来ていない症例がある（埋もれている）ことや内服のステロイドが処方されているなども問題となっていた。

アトピー性皮膚炎では継続した診療が必要とされるが、病院が少なく、通院に時間がかかることによる患者への負担も問題として挙げられた。地域によっては、皮膚科医師でアレルギー専門医を有する者が離職したため不在となっているとの現状であった。

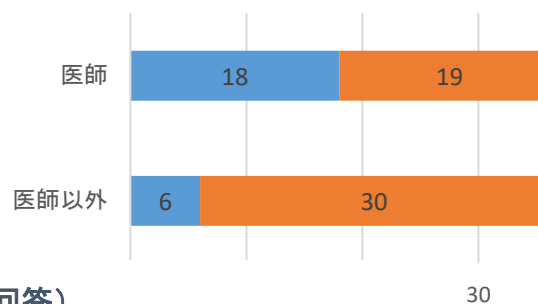
#### <眼科>

アレルギーの患者さんは、一臓器だけでなく多臓器にアレルギー疾患を合併していることが多い。ゆえに、主要5科（内科・小児科・皮膚科・耳鼻科・眼科）のアレルギー専門医多様なアレルギー疾患を持つ一人の患者を、診療科横断的に診られるようなシステム作りが大切と思われる。地域眼科との病診連携に関しては重症者のみご紹介いただくので通常診療の状況は詳細不明とのことであった。

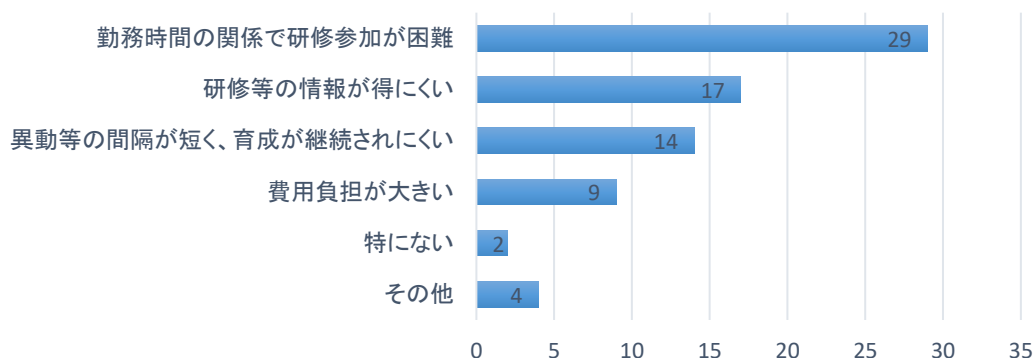
### 7. 医師及び医師以外の資質向上への取り組みと課題

医師及び医師以外の資質向上に関する取り組みが行えている施設は少なかった。特に医師以外の資質向上への取り組みが行われていなかった。こうした人材育成の状況における課題としては、勤務時間の関係により研修への参加が難しいこと以外に異動等の間隔が短く育成が継続されにくいことも挙げられた。その他では、小児科で「急性期疾患の診療も担う3次医療機関では、

資質向上への取り組み(n=37)



人材育成の課題(複数回答)



死に至る可能性の低いアレルギー疾患診療の必要性や重要性をアピールすることが難しい。」ことや内科では、「マンパワーがない」「育成の希望者を把握できていない」「アレルギー診療に興味がない」との回答があった。